

The 45th Anniversary  
**Cappella Accademica**  
The 50th Concert

演奏曲目

G.P.テレマン：3つのトランペットとティンパニーの為の協奏曲ニ長調

トランペット：福田 徳久、岡部 比呂男、大畑 和也

ティンパニー：今泉 好雅

G.F.ヘンデル：王宮の花火の音楽（全曲）HWV351

~~~~~休憩~~~~~

J.S.バッハ：ブランデンブルク協奏曲 第5番ニ長調 BWV1050

ヴァイオリン：釘本 英範 フルート：石川 真理

チェンバロ：釘本 真理

F.J.ハイドン：交響曲第31番 ニ長調 『ホルン信号Hob. I : 31 』

指揮：吉川 紀彦

**2019年10月19日(土) 浜松市福祉交流センター**

開場：午後1時30分 開演：午後2時

主催：カペラ・アカデミカ

助成：(公財)はましん地域振興財団

後援：浜松市、(公財)浜松市文化振興財団、静岡新聞社・静岡放送、中日新聞東海本社、K-mix



ホール内容客席では携帯電話など全ての電子機器の電源をお切りください。タブレット端末など光を発する機器も、周囲の方の鑑賞の妨げとなりますので、ご使用にならないようお願いいたします。

## 祝 辞

カペラ・アカデミカの記念すべき50回目の演奏会にあたりお祝いを申し上げます。

カペラ・アカデミカは1974年10月に豊橋市民文化会館および浜松カトリック教会で開催された「バッハのタペ」において、「ポリフォニカ・アンブロジーナ」（浜松）、「ポリフォニカ・グレゴリアーナ」（豊橋）という合唱団の伴奏のためのオーケストラとして浜松及び豊橋在住の演奏者を主体に結成されました。

これらの合唱団は、故濱田徳昭先生のご指導のもと1973年3月21日（バッハの誕生日）に設立された「古典合唱研究会」を母体としており、後（1985年）に「浜松バッハ研究会」として、文字通りバッハの音楽をこの地に響かせる大きな役割を担いました。この活動と歩調を合わせるようにカペラ・アカデミカはバロック期の器楽合奏音楽を中心に意欲的な取り組みを続けてきています。

合唱活動にはいろいろな変遷がありましたが、カペラ・アカデミカは一貫して意欲的な活動を継続され、ここに45周年の第50回演奏会を開催される運びとなったわけです。

思えば浜松も豊橋も県都でないせいか、かつては文化面で今一つ出遅れ感の否めない状況であったと思います。しかし今や50年近く続いているアマチュアのアンサンブルやオーケストラが複数団体存在し、東三河と遠州による確固たる三遠文化圏が形成されている状況ではないでしょうか。その中でカペラ・アカデミカは常にトップランナーとして意欲的なプログラムに挑み続け、今日の輝かしい地位を築かれたと思います。

リーダーの吉川紀彦様を中心にしたメンバーの皆様のチームワークのすばらしさと、音楽に対する熱い想いに敬意を表しつつ、記念演奏会の開催を心よりお喜び申し上げます。

今後ますます飛躍されますことを祈念してご挨拶とさせていただきます。

浜松バッハ研究会代表 河野周平

## 御挨拶

本日は、カペラ・アカデミカの創立45周年記念第50回定期演奏会にご来場戴き有難うございます。

カペラ・アカデミカは、昭和49年（1974年）創立以来浜松、豊橋両市を拠点に、バッハ、ヘンデル、コレリ等のバロック音楽を主たるレパートリーとし、時折モーツァルト、ハイドン等の初期古典派の作品を加えて、演奏会を開催してまいりました。昭和49年9月2日に故濱田徳昭先生のご指導により初練習を開始してから今年で45年となります。この45年間の活動を顧みて、団員一同感激を新たにしておりますが、このように長く活動できたのもひとえに皆様の暖かい御支援のお陰と心より感謝しております。今後とも音楽を通じて遠州・東三河の三遠南信文化交流のお役に立てることを切に願っております。

今回は、記念の演奏会としてドイツ・バロックと初期古典派の作品を取り上げました。テレマンの3つのトランペットとティンパニのための協奏曲は、浜松では初演だと思われます。ヘンデルの王宮の花火の音楽は有名ですが比較的取り上げられる機会が少ない曲です。バッハのブランデンブルク協奏曲第5番はよく知られており、当楽団でも過去に何回となく演奏したことがあります。ハイドンの交響曲第31番『ホルンシグナル』は、名前の通り4本のホルンが活躍するほかヴァイオリン、チェロ、コントラバスのソロなど随所に協奏曲的な趣があり非常に楽しい曲ですが、難曲のためか演奏されることは少ないようです。

今後ともサロンのような雰囲気を楽しみ演奏会作りを心掛けながら、更に新たな成長に向かって精進して参りたいと考えております。これからも私達の活動を温かく見守って頂き、ご声援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

カペラ・アカデミカ団員一同

## 出 演 者

### 吉川 紀彦(指揮)

神奈川県横浜市出身。ヴァイオリンを藤田康夫、指揮法を濱田徳昭の各氏に師事。大阪労音管弦楽団でヴァイオリン奏者兼練習指揮者として活躍。1970年に大阪市民管弦楽団の設立に参画。1974年にカペラ・アカデミカの設立に参画。ヤマハ発動機(株)勤務後、(株)アルモニコス設立に参画、代表役員等を経て、現在アルカート(海外技術コンサルタント業)代表、カペラ・アカデミカ代表を務める。

### 釘本 英範(ヴァイオリン)

佐賀県鳥栖市出身。5歳よりヴァイオリンを始める。大学卒業後(株)河合楽器製作所に入社。カペラ・アカデミカ及び浜松バロックアンサンブルのコンサートマスターを務める。大学時代には濱田徳昭先生指揮の大学オーケストラで、リムスキー・コルサコフの交響組曲「シエラザート」のソロを担当。趣味は家庭菜園、休日は借りた畑に通い、主に雑草取りをしながら時々収穫される野菜にこの上もない喜びを感じる。

### 石川 真理(フルート)

静岡県磐田市出身。常葉学園短期大学音楽科卒業、同専攻科音楽専攻終了。学士芸術学の学位取得。在学中にモスクワ音楽院のセミナーに参加。フルートを川崎優、北川祥子、田中貫一各氏に師事。卒業後、渡独しミュンヘン音楽大学にて H.クレマイヤー氏の下で研鑽を積む。日本フルート協会、静岡県フルート協会理事、浜松フルートクラブ各会員。現在、静岡県西部地域を中心に演奏活動及び後進の指導にあたる。

### 釘本 真理(ハープシコード)

静岡県浜松市出身。京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専攻卒業。ピアノを荘良江、園田高弘、下村和子、室内楽を岩崎淑の各氏に師事。現在、ピアノ及びチェンバロによる室内楽を中心に音楽活動をする。

### 福田 徳久(トランペット)

岡山県井原市出身。トランペットを宮村聡、橋爪伴之、両氏に師事。大学院修了後、ヤマハ(株)に入社。管楽器開発チームの一員としてトランペット他多くの高音金管楽器の開発に一貫して従事。現在、トランペットのフラグシップモデルの開発に携わる。現在(公財)浜松交響楽団団員。

### 岡部 比呂男(トランペット)

茨城県日立市出身。トランペットを大倉滋夫氏に師事。大学卒業後、日本楽器製造(株)(現ヤマハ(株))に入社。創設から間もない管楽器開発チームの一員として、ヤマハ管楽器を現在の品質まで向上させる足掛かりを作る。ヤマハ(株)役員を経て、現在(公財)浜松交響楽団理事長。

### 大畑 和也(トランペット)

静岡県浜松市出身。トランペットを柴田豊一、木曾田寛、両氏に師事。大学卒業後、厚生労働省静岡労働局に入省して働きながら演奏活動を行う。現在(公財)浜松交響楽団団員。

### 今泉 好雅(ティンパニ)

静岡県浜松市出身。1982年、浜松交響楽団にティンパニ&打楽器奏者として入団、現在に至る。これまで主要な交響曲のティンパニを担当、1986年、交響詩「はままつ」(小山清茂)初演でマリンバ独奏を担当、浜松市民オペラでは第1回「カルメン」から第5回「魔笛」、第7回「ブラック・ジャック」のティンパニを担当する。他、全国アマチュアオーケストラフェスティバルでティンパニを演奏。ティンパニを山口十郎、マリンバを山下文恵の各氏に師事。

### カペラ・アカデミカ

浜松と豊橋在住の専門家、アマチュアにより結成された室内合奏団で、今は亡きバロック音楽の大家で現天皇陛下が師事された故濱田徳昭先生により命名され、1974年(昭和49年)9月2日に誕生。濱田先生のもとで主に宗教曲の演奏法などを学び、その後合奏団独自の定期演奏会を年2回及びその他の演奏会を2~3回開催し、室内アンサンブルのインティメイトな世界を創り上げることを目標としている。

| <u>1<sup>st</sup> Violin</u> | <u>2<sup>nd</sup> Violin</u> | <u>Viola</u>   | <u>Cello</u>   | <u>Double bass</u> | <u>Harpsicord</u> |
|------------------------------|------------------------------|----------------|----------------|--------------------|-------------------|
| 今井 重人                        | 末田 良                         | 木下 正明          | 佐藤 隆行          | 小林 哲               | 釘本 真理             |
| ◎釘本 英範                       | 宮崎 秀生                        | 桑原 義彦          | 浜島 吉男          | 早川 浩一              | <u>Timpani</u>    |
| 永井 正子                        | 村上 香織                        | 小林はる奈          | Lynn Konishi   | <u>Horn</u>        | 今泉 好雅             |
| 林 明子                         | 山中 哲                         | 船山 敏           | <u>Trumpet</u> | 小出 寿朗              |                   |
| <u>Flute</u>                 | <u>Oboe</u>                  | <u>Bassoon</u> | 岡部比呂男          | 佐藤 博子              |                   |
| 石川 真理                        | 大橋 弥生                        | 斎藤 善彦          | 福田 徳久          | 袴田 和弘              |                   |
| 続 真樹                         | 佐藤妃南乃                        |                | 大畑 和也          | 三澤 正之              |                   |

◎はコンサート・マスター

## 曲目解説

### ■ゲオルク・フィリップ・テレマン(1681～1767):3つのトランペットとティンパニの為の協奏曲ニ長調(54:D4)

テレマンは、ドイツ、バロック後期の超人気作曲家。ライプツィヒ大学で法律を学び、音楽は独学。ハンブルク市の音楽総監督を生涯務めました。各地の様式を使いこなし、膨大な作品を残し、出版事業やプロモーターとしても才能を発揮しました。今回演奏する曲は、バロック時代の終わりごろに書かれた曲で、題名の通り3つのトランペットとティンパニが独奏楽器として活躍する華やかな曲です。この作品は、特定の名手を想定して作曲され、祝祭の開催時に演奏されたものです。

第1楽章:ラルゴ、第2楽章:アレグロ、第3楽章:アダージョ、第4楽章:プレスト

### ■ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685～1759):王宮の花火の音楽(全曲)HWV351

ヘンデルは、バッハと同じ1685年に生まれたバロック期を代表する作曲家で、ドイツで活躍した後にイギリスに帰化して生涯を終えました。今日演奏する「王宮の花火の音楽」は、1748年オーストリアの支配権継承をめぐって8年間も続いた国際戦争が終結し、イギリス国王ジョージ2世は戦勝を祝うための記念行事を行うように指示を出しました。この行事の一環として大花火大会が行われることになり、このための祝典音楽を依頼されたのが、既にドイツからイギリスに帰化していたヘンデルでした。楽器編成は、屋外の大観衆の中での演奏を考え、当時としては異例の管楽器、打楽器のみで100人規模のものだったようです。事実、花火を伴わず行われたリハーサルにも1万2千人、本番ではそれ以上の聴衆の前で演奏が行われたそうです。したがって、この作品は1回限りの機会音楽だったわけですが、後に弦楽合奏も加えられ、コンサート用のレパートリーとして定着しました。曲は、『序曲』、『ブーレ』、『平和』、『歓喜』、『メヌエット』の全5楽章からなっています。祝典音楽にふさわしく華麗で活気溢れる『序曲』、『歓喜』、軽快な『ブーレ』、ゆったりとした『平和』、『メヌエット』と変化に富んでおり、非常に親しみやすい曲です。

### ■ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685～1750):ブランデンブルク協奏曲第5番ニ長調 BWV1050

第5番は、全6曲の協奏曲の中で最も有名で親しまれている曲といえるでしょう。独奏楽器は、ハープシコード(チェンバロ)、フルート、ヴァイオリンですが、なんといってもチェンバロが主役です。第5番は、バッハがケーテンの宮廷楽長を務めていた時に書かれたものです。当時、バッハが仕えていたケーテンの領主が大金をはたいてチェンバロを購入したという記録があり、チェンバロが到着したときにバッハが領主に抱いた感謝の気持ちは、とても大きかったと思います。早速、このチェンバロを使った新しい協奏曲として作曲されたのが、この第5番です。バッハは、宮廷楽団の中ではヴィオラを弾いていたのですが、バッハがチェンバロの演奏にまわるようになったためできてしまったヴィオラの穴を埋めるため、ヴァイオリンの2人のうち1人をヴィオラに回しています。そのため、この曲は、第2ヴァイオリンを欠いています。さらに、俊敏なチェンバロと対等に演奏できるよう、フルートを用いています。

第1楽章:アレグロ、第2楽章:アフエトゥオーソ、第3楽章:アレグロ

### ■フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809):交響曲第31番『ホルンシグナル』Hob.I.31

交響曲の父と呼ばれたハイドンは、1732年ウィーン南東のローラウ村で貧しい車大工の家庭に生まれました。1755年フェルンベルク伯爵家のヴァイオリン奏者として音楽家の生活を始め、1759年にはモルツィン伯爵家の楽長となり最初の交響曲を作曲。1761年エステルハーゲン公爵家の副学長、1766年に楽長の地位に就き1790年楽団が解散する迄、数々の交響曲、弦楽四重奏曲を作曲しました。ハイドンには4本のホルン使用を指定した交響曲が4曲あり、第13番・第72番は1763年に、第31番・第39番は1765年に作曲されています。その中でも第31番は「ホルン信号付き」(Mit dem Hornsignal)と題され、ホルン演奏者に素晴らしいテクニックを披露するチャンスを提供する作品と知られています。しかし、第2楽章の第2ホルンの演奏部分が極めて困難であるとの悪評もある様です。これはドイツ圏ではワルドホルン(狩のホルン)が伝統として残され、それを再現する技法を用いたからとも言われています。「ホルン信号(Horn Signal)」では、まるで協奏曲の様にホルンの演奏から始まるのが魅力的です。ホルンは本質的に重厚でゆったりした演奏をさせるのが普通ですが、この交響曲ではトランペットの様な軽やかなパッセージがちりばめられているため、演奏家にとっては難曲ですが、聴く者にとっては、意表を突かれるような堪らない魅力を持った交響曲となっています。

第1楽章:アレグロ・モルト、第2楽章:ラルゴ、第3楽章:アレグロ